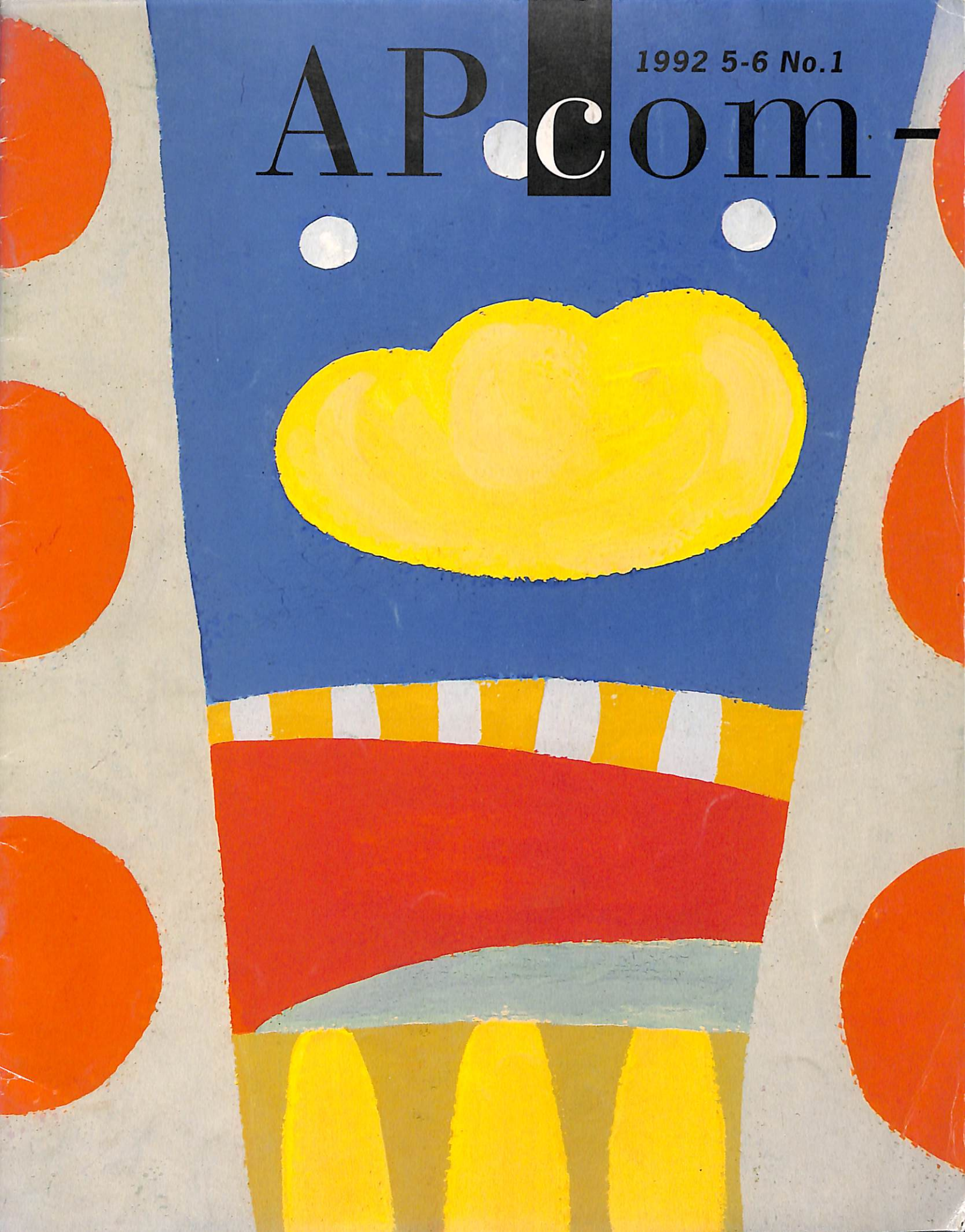
AP.com

1992 5-6 No.1



シエナ 時を超える中世の夢

イタリア中部、トスカナ地方の丘の上に建つ都市シエナ。中世の時代、経済・都市文化・芸術の中心地として栄華を誇った、輝かしい星のような都。当時の面影をそのまま残した、イタリア屈指のこの美しい中世都市は、今も多くの人々を魅了し続けている。世界の建築文化を訪ねる旅の第1回目は、YKK APのコーポレートカラーのひとつである「シエナブラウン」の故郷、シエナからスタートする。

写真：普後均

AP com-REPORT 世界の建築文化を訪ねて ① シエナ／時を超える中世の夢 1
シエナ…市民精神が生んだ都市の美 石鍋真澄 11
シエナ・ミュージアム・ガイド 13
シエナの都市と建築を知るキーワード 15
AP com-AREA STUDY 販売店のあるまち ① 東京・江戸川区南井上建装 17
AP com-FORUM ARCHITECTURE VIEW UP 三起商行新社屋／ARTEM casa 21
INFORMATION '92グッドリビングショー／関西新国際空港ターミナルビル 25

制作協力…株式会社I&S 株式会社アルシーヴ社 AD…伊丹友広 デザイン・レイアウト…イットイズデザイン 表紙イラストレーション…冨沢 天

サン・ドメニコ聖堂前の広場から見たシエナ市街。市内でいちばん高いカステルヴェッキオの丘の上に、ドゥオーモのクーポラ（円蓋）と鐘楼がそびえ立つ。

レンガ瓦の家々がひしめくように密集する。

フィレンツェからSITAの特急バスに乗って約1時間、葡萄畑とオリーブ畑が広がるトスカナの美しい丘陵地帯を抜けてシエナに着いたときは、夕刻をとうに過ぎていた。あいにくの雨。レンガの街並みは重く垂れ込めた雲の下、沈鬱な面持ちで佇んでいる。鳴り響く教会の鐘の音、家路を急ぐ人々の足音や話し声が、曲がりくねった狭い石畳の坂道にこだましているかのように、ゆったりと流れていく。一瞬、雨雲が切れて、西に傾いた太陽が差し込むと、街は輝くような黄金色に染まった。古びた赤褐色のレンガ、黄褐色のもの、灰色がかった褐色…少しずつ色合いが違うレンガの壁と瓦が、西日に照らされて壮大なモザイク模様を描いている。

やがて夕闇が落ちはじめると、ほのかな灯りと影に溶け込む壁の色と、細長い路地の上に浮かぶ雨上がりの紺碧の夜空とが、美しいコントラストを見せる。

天候が不順な季節に訪れたせいだろうか、わずか1〜2時間の間に、レンガづくりのこの小さな都市は、まったく違った表情を見せて迎えてくれた。おそらく四季折々に、そして一日の時の流れの中でも、光と影が交錯して、さまざまな表情をつくりだすのだろう。路地に反射する光、流れる雲、吹き抜ける風…自然のひとかけらがつくる一瞬の陰翳、刻々と変化する街の表情は、ふたつとして同じものがないように思われる。シエナの色は、悠久の時そのものである。

下2点共：光によってさまざまな表情を見せるレンガづくりの都市。刻々と変化する微妙な陰翳が悠久の時を感じさせる。

Città

中世の丘上都市

うねるように続く坂道、見え隠れする教会の尖塔や郊外の糸杉の木立ち…丘の上の都市では、歩くに連れてその光景もつぎつぎに変わる。起伏を巧みに生かした美しい都市の景観がシエナの最大の魅力である。

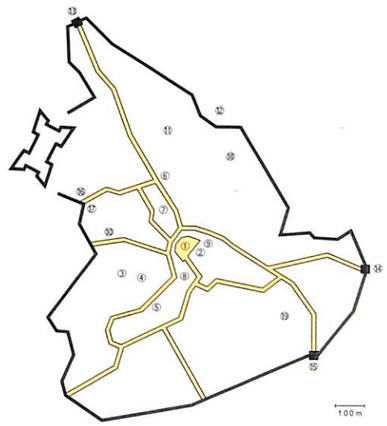
シエナは坂の街。上り下りする狭い路地が迷路のように張りめぐらされている。

シエナの街を概観するには、市内で最も高いマンジャの塔から眺めてみるのがいい。市街は標高320mほどの三つの丘にまたがって広がり、周囲を城壁がぐるりと取り囲んでいる。南北約2km、東西1.5kmほどのこじんまりとした街。眼下にはひしめくように密集したレンガ瓦の家々、その隙間から天に向かってのびるドゥオーモの円蓋、鐘楼。そして三つの丘が交わる谷の傾斜地には有名なカンポ広場と市庁舎。丘の起伏を巧みに取り入れた都市の美しい光景が広がるばかりである。

街を歩いていてもシエナは美しい。突然現われる、曲がりくねり、坂を上下する路地に、つい心ひかれてさまよいこんでしまう、この優雅な街のたたずまいはどこからくるのか。「完成された美をもつ中世都市の、もっともよきモデル」とされるシエナ。じつは、そこには都市建設へのはかりしれない労力が費やされていたのである。

中世末期、偉大な建設の時代といわれる13世紀に、各地では聖堂や市庁舎などが建てられ、秩序ある都市への改造が試みられるが、シエナほど都市整備にエネルギーを傾けた例はないのではないか。ドゥオーモや市庁舎の建設はもちろんのこと、暗く狭い道路を拡張してレンガで舗装し、広場をつくり、パラッツォを建て、そしてそれらをロマネスクやゴシックなどの様式にシエナ独自の繊細な感覚をプラスして装飾していったのである。さらに都市や建築物の美観を保つために、さまざまな条例を出して実行していったという。現代ならともかく、すでに中世の時代にこうした都市づくりが、しかも市民の自治組織のレベルで行なわれていたのである。

石畳みの補修工事。すべり止めのために石を削る作業はなかなか大変である。



①カンポ広場
②市庁舎、マンジャの塔、市立美術館
③ドゥオーモ
④ドゥオーモ付属美術館
⑤国立絵画館
⑥パラッツォ・サリンベーニ
⑦パラッツォ・トロメーイ
⑧パラッツォ・キジ・サラチーニ
⑨パラッツォ・ビッコロミニ
⑩フォンテ・ブランダ
⑪フォンテ・ヌオーヴァ
⑫フォンテ・ドヴィーレ
⑬ポルタ・カモッリーア
⑭ポルタ・ビスピーニ
⑮ポルタ・ロマーナ
⑯バス発着所
⑰サン・ドメニコ聖堂
⑱サン・フランチェスコ聖堂
⑲サン・マリア・ディ・セルヴィ聖堂

上、下：世界で最も美しい広場といわれるカンポ広場。放射状の8本の線がカンポ広場を9つに分割している。これはノーヴェ体制、すなわち9人の執政官を表している。

都市建設への類い稀なる努力の成果、その代表とされるのが、シエナのへそ、三つの丘が交わる中心部にあるカンポ広場と市庁舎である。道路から石段を降りると、正面に見える市庁舎に向かって、半円形の広場はゆるやかなスロープを描いて下っていく。敷き詰められたレンガの合間に、放射状に入った8本の白いライン。このラインが市庁舎の前でひとつに集まり、広場を貝殻の形に仕立てている。傾斜しているので、座れば視線は自然に中心に向かう。まさしく劇場のような広場。ここでシエナのすべての歴史のシーンが、祝祭の時間が流れていったのである。それにしてもこの卓越した設計…。世界で最も美しいと称賛されるこの広場が、いったい誰によって構想されたのか。記録にその名前は残っていない。そして、正面に建つパラッツォ・プッブリコと呼ばれる市庁舎。1284年頃から増築を繰り返しながら1310年に完成したこの建物に、じつはシエナの建築物に共通する装飾のスタイルが特徴的に現われている。あるいは他の建築物がこの市庁舎に倣ったというべきか。

まず尖頭アーチのついた開口部。窓の場合は、このアーチの中にさらにアーチをつくって小柱で支える、アルコ・セネーゼと呼ばれるシエナ独特の優雅な手法がとられる。次に屋上部の胸壁。これは戦闘時に攻撃から身を守るための実用本位のものだが、ここにもレンガの積み方に変化をつけて縞模様の装飾をつけている。そして、胸壁の下には反復するコーニス(軒蛇腹)。

いずれもゴシック様式の影響を受けながらも、シエナ独自の繊細な美意識と伝統を反映したものである。

市庁舎とマンジャの塔。

Palazzo

シエナの建築装飾とパラッツォ

威容をみせる貴族や商人たちのパラッツォ。
ここにもシエナ独特の、繊細で洗練された美意識が息づいている。

13世紀のシエナが商業都市として栄華を誇ったのは、フランスとローマを結ぶ交通の要所に位置していたこと、そして教皇グレゴリウス9世が十字軍派遣の費用の徴収をシエナの銀行家に任せたことによって、ヨーロッパの金融業の中心地になったためである。

富を蓄えた貴族や大商人たちはパラッツォを建ててそこに住んだが、当時のパラッツォが、現在は銀行や音楽院などに利用されて市内の目抜き通りに点在している。地図でわざわざ確認しなくても、街をぶらぶら歩いていると、すぐ見つかる。それほど特徴がはっきりしているのである。

まず、おおむね3階建てで、建物のフォルムは縦長、上部には凹凸のある胸壁がつく。これが当時の一般的なスタイルで、中庭のある一階は入口と接客のための部屋、二階が家族の居室と寝室、三階が納戸や使用人の部屋となっていた。このパラッツォにもシエナ独特の建築装飾が施されている。市庁舎と同じく、アルコ・セネーゼと呼ばれる二重にアーチをかけた瀟洒な窓枠。曲線を反復させたコーニス(軒蛇腹)。そして縞模様の装飾が施された胸壁。同時期につくられたフィレンツェのパラッツォ・ヴェッキオが、面の粗い切石積みで、いかにも要塞然とした無骨な姿を見せているのに比べると、シエナのパラッツォは優雅で洗練された美を誇っている。シエナ派の絵画などにも共通する繊細な感覚がここにも息づいている。

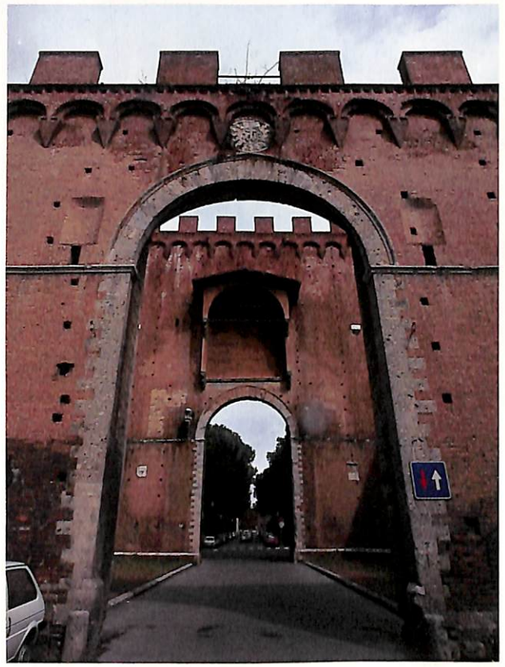
左：現在キジ音楽院となっているパラッツォ・キジ・サラチーニ。
右：アルコ・セネーゼと呼ばれる瀟洒な窓枠が印象的なパラッツォ・サリンベーニ。
下：雨の日の窓ごしに見るパラッツォ・サリンベーニ。

パラッツォ・パペッセ。

Porta／Fonte

城門と泉に刻まれた歴史

丘の周囲をとり囲む古い城壁。点在するフォンテ(泉)。
人々を守り、貴重な水を湧きあげた建築物が、
中世の暮らしを彷彿させる。



中世都市にとって城壁は、防衛上なくてはならないものであった。と同時に、それは都市そのものの象徴でもあった。
新石器時代にまで遡る城壁の歴史…。メソポタミアのウルの城壁は厚さ25〜34m、バビロンの城壁は25mもの高さだったという記録が残っている。二重、三重に囲んだものもあった。では、シエナの城壁はどうか。自然の要塞ともいえる丘の上にあるせいか、壁そのものはそれほど厚くも高くもない。しかし土地の高低差や起伏を巧みに利用しているために、いかにも難攻不落といった感がある。当時の一般的な武器といえば石(岩)つぶてと弓矢である。13世紀に入って大がかりな投石機が登場するが、それでも届くほどの距離には至らなかったにちがいない。
一方で、城壁の存在は、膨張する都市にとっては障害でもある。居住地域のスプロール化によって、外へ外へと、城壁は何度もつくり変えられることになる。シエナの場合も例外ではなく、数度にわたって拡大され、現在残されている周囲約7kmほどの城壁は15世紀につくり直されたものである。その1世紀後、火器、すなわち大砲の登場によって、城壁は絶望的に時代遅れのものになってしまうのだが…。

左：ポルタ・ビスピーニの横につけられた稜堡(りょうほう)。上に三つの砲台がついており、軒蛇腹で装飾されている。
右：ポルタ・カモッリーア。市内に南北に走るフランチジェナ街道の北に位置する城門。シエナの城門はアンテポルタ(前門)をもつ二重構造になっているのが特徴。

当時は78ものフォンテと12の公共井戸があったという。フォンテ・ブランダ。

丘の起伏を利用した城壁が市内を取り囲む。

上：中世シエナのフォンテは、ほとんどに屋根がついているのが特徴である。なかでも最も古いフォンテ・ブランダは、破風つきの大きなアーチにシエナの紋章、軒蛇腹とライオンの樋口で飾られている。
下：フォンテ・ヌオーヴァ。

Duomo

聖母が輝くゴシックの大聖堂

**フィレンツェのドゥオーモのように絢爛でもなく、
ミラノのもののように豪華でもない、シエナのドゥオーモ。
ここにはロマネスクとゴシックが渾然一体となった不思議な魅力がある。**

3点共：カステルヴェッキオの丘の上に立つドゥオーモ。
ファサードの下層部はジョヴァンニ・ピザーノの設計で、彼とその弟子たちによる彫刻が飾られている。

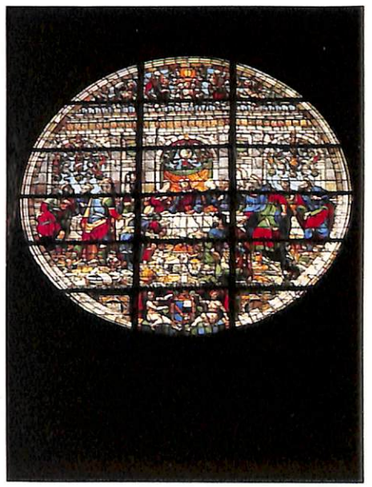
ドゥオーモは市の中心部、いちばん高いカステルヴェッキオの丘の上に、シエナを見守るようにそそり立っている。聖人や天使の彫刻が躍る円柱が、空に向かって、神の国に向かって伸びるファサード。その上部には聖母マリアの絵が輝いている。遠くからでもすぐ目につく、白と暗緑色の横縞模様の鐘楼。内部の柱も同じ横縞模様で統一され、床には56の図柄が描かれたモザイク装飾。さらにニコラ・ピザーノの華麗な彫刻の説教壇、ドゥッチョのステンドグラスなどが、荘厳な空間をつくっている。
このドゥオーモはイタリア・ゴシック初期の代表的建築とされているが、よく見るとトスカナ・ロマネスクの要素も入り混じっている。

白と暗緑色の横縞模様の鐘楼。

ドゥオーモの南側に中途半端に突き出している巨大な壁体。これはさらに大きな新聖堂をつくろうとして未完のままに終わってしまった残骸である。この計画は、現在の十字型の縦軸を横軸として用い、短い横軸の部分を拡張しようという、つまり建物の向きを90度変えるという大胆な発想のものであった。

シエナのドゥオーモのクーポラは、
正円ではなく六角形をしているのが特徴。

たとえば、六角形のクーポラを十字型の建物の縦軸部分の左右いっぱいに広げているところ、ジョヴァンニ・ピザーノ設計のファサードの下層部はロマネスクの影響が色濃いが、ピザーノ亡きあとにつくられた上部の部分はあきらかにゴシックである。もちろん、50年100年の長期にわたってつくられる巨大な建築物の中に、さまざまな様式が混在するのは当然のことだろう。
シエナの他の建築についても言えることだが、こうした融合の美、渾然一体となりながら調和を生みだす魅力、シエナ独自の感性のもとに溶け合っている魅力が、この街の表情をより豊かに、より美しくしているように思えてならない。



扉口上部の
ステンドグラス。

シエナ：市民精神が生んだ都市の美

石鍋真澄

あるイタリアの学者は、シエナの都市史を概観したすぐれた本の序文に、学者にとってシエナについて語るのは非常にむずかしい、と記している。「シエナと恋におちいることなく、シエナについて研究しシエナを知ることはできないが、人も知るように、恋におちた者は客観的ではありえないからである」。私も4年ほど前に、シエナに関する一書を出版した。だから、このイタリアの学者のいうことはよく分かる。

実際、シエナはイタリアのみならず、ドイツやフランス、イギリスやアメリカの人びとを魅了し、多くの研究をうながしてきた。いうまでもなく、それは中世のシエナがすばらしい美術作品を残し、中世の面影をとどめた都市のたたずまいが独特の魅力を秘めているからである。だが、それだけではない。シエナに暮らす人びとにアニマ·セネーゼ、シエナ魂が生き続けており、それが訪れる者の心をとらえるのである。

19世紀フランスの芸術理論家イッポリート·テーヌは、シエナを「中世のポンペイ」と呼んだ。なるほど、ポンペイがいかなる書物よりも古代ローマの生活を実感させてくれるように、シエナは中世の人びとが生きた空間をわれわれに体験させてくれる。しかし、それが灰に埋まった遺跡都市ではなく、いわば「生けるポンペイ」である点を忘れてはならないだろう。シエナは、たとえば「塔の都市」として有名なサン·ジミニャーノのような、博物館と化したような中世都市ではない。中世の生活文化や人びとの市民意識の伝統、つまり「シエナ魂」が今も色濃く残る稀な都市なのである。

私はイタリア美術史を研究しているが、イタリアの美術や都市について書いたり話したりすると、最後は、ぜひ行って自分の目で見てきてください、ということになってしまう。まるでイタリア観光局の差し回しといった具合だが、心からそう思うのである。とりわけシエナのような都市の場合には。だがそれと同時に、シエナを訪れる人に、ぜひ知ってもらいたいことがいくつかある。

まず第一に、ドゥッチョやシモーネ·マルティーニなどのすばらしいシエナ派の絵画も、シエナの都市そのものも、市民の自治によって成り立っていた、コムーネと呼ばれる都市国家が残した遺産だということである。日本の歴史には都市国家の時代というものがない。そして、市民が互いに治めたり、治められたりする共和政の経験もない。だから、私がシエナの歴史と美術を理解しようとしたときにも、この都市国家のしくみや市民たちの愛国心と市民精神を会得するのに最も苦労した。

もちろん、今日われわれが考えるような民主主義が行われていたわけではない。すべての市民が市政に参画していたわけではなく、市政の実権をにぎってきたのは、ひとにぎりの貴族·大商人たちであった。けれども、商人を中心とする市民の中から選挙と抽選で選ばれた、市の最高首脳ノーヴェ、つまり9人の評議員たちは、公平をきたすために他の市民との接触をさけ、任期の2カ月間を市庁舎に住み込んで市政に当たったのである。

中世の美術というと、宗教美術という一言で片づけられることが多い。美術活動は教会が統括しており、美術家は教会のいうままに仕事した職人だった、というわけである。しかし、シエナでは市庁舎の建設やカンポ広場の整備といった事業はもちろんのこと、ドゥオーモ(大聖堂)をはじめとする聖堂の建設も、「ノーヴェ」を中心とする市当局が立案し実行した。それらの事業は市の予算で行われたのだし、それを推進したのも俗人、つまり一般の市民であった。だから、たとえば大聖堂は、宗教的な建造物であると同時に、宗教心と一体となった愛国心や市民精神の記念碑だといえるのである。

同様に、大聖堂の主祭壇画や市庁舎の評議会の間を飾る壁画といった、大規模な美術作品の企画も市当局によって推進された。今日オペラ·デル·ドゥオーモ(大聖堂付属美術館)におさめられている、有名なドゥッチョの大作《マエスタ(荘厳の聖母)》もそうして制作された。このイタリア中世絵画の一大傑作が、1311年に完成してドゥッチョの仕事場から大聖堂に運ばれたときの様は、まさに感動的である。年代記作者によれば、大司教や、手に手にローソクをもった市の首脳を先頭に、全市民がプロセションに加わり、その行列はドゥッチョの仕事場を出て、慣例にしたがってカンポ広場を一周してから大聖堂に向かった。そのときかくも気高い作品に敬意を表して、町中の鐘が鳴り響いたというのである。

1260年のモンタペルティの戦いで宿敵フィレンツェに奇跡的な勝利をおさめて以来、シエナ市民は自分たちの都市こそ聖母の特別の恩寵を受けた「聖母の都市」であると考えるようになった。だから、大聖堂の主祭壇をかざるドゥッチョの《マエスタ》は、いわば「市の聖母像」だったのである。市民の期待にこたえるべく渾身の力をこめて制作に当たったドゥッチョは、完成した作品に誇らしげにこう署名している。

「おお聖なる神の母よ、シエナに平和を、ドゥッチョに生命を与えたまえ。私はかくのごとくあなたを描いたのですから」

当然のこととして、パラッツォ·プッブリコ、つまり市庁舎の装飾にも政治的意味がこめられている。「鐘の評議会」と呼ばれた市議会がひらかれた「評議会の間」の正面には、ドゥッチョの作品を範としたシモーネ·マルティーニの《マエスタ》が描かれているが、そこには、私利私欲に動かされて勝手な振る舞いをする者がいます、と守護聖人が聖母に奏上する銘文が記されている。さらに、キリストは「汝地を治める者よ、正義を愛せ」と書かれた紙片をもって、市議会にあつまる市民たちに警告しているのである。

この「評議会の間」のとなりの最高評議会が開かれた「ノーヴェの間」(今は「平和の間」と呼ばれる)には、シエナ市民の政治哲学を表現した稀な壁画が描かれている。正面には「善き政府の寓意」、つまり市民たちの「和合」によって「公共善(国の利益を優先させるという思想)」と「正義」が結ばれるという共和主義の理想が図示され、両側の壁には、それぞれ善き政府と悪しき政府が治める都市国家の様子が描かれているのだ。風俗絵巻さながらのこれらの壁画は、ドゥッチョ、シモーネ·マルティーニにつづくシエナ派第三の画家アンブロジオ·ロレンツェッティの傑作である。

さらにもう一つ、シエナを理解するうえで知っておいてほしいことがある。それはシエナという都市の成り立ちと、中世の都市建設の基本的発想である。

シエナの町並みは三つの丘の上にY字型にひろがっている。この三つの丘の中で最も高いカステルヴェッキオの丘に、最初の市街が発達した(今日その丘に大聖堂が建っている)。そして、尾根づたいに市を貫くフランチジェナ街道(フランス街道、ローマとフランスを結ぶ中世の主要街道。この街道による地の利が、銀行業や貿易による中世シエナの経済発展をもたらした)に沿って、新市街ができてゆき、14世紀に今日みるシエナの町が出来上がったのである。

シエナはこれら三つの丘に符合する、三つのテルツォ(行政地区)に分けられ、あらゆることがテルツォを単位として行われた。市の政治·経済の中心となる市庁舎とその前のカンポ広場が、三地区の接点に建設·整備されたのは、場所の便利さにくわえて、政治的中立を保つためであった。しかもそれらは、尾根から下がったところに、地形にさからわず、巧みに斜面を利用して造られている。

16世紀のシエナを訪れたモンテーニュは、「町で一番美しい場所は、実に壮大な円形の広場である」と記しているが、円形劇場を思わせるカンポ広場の空間は実に人間的である。それは中世都市建設の傑作であり、世界でも最もすばらしい広場の一つである。

このように、市一番の高所に建つ大聖堂と、政治的中立を表明する市庁舎とカンポ広場とを巧みに対比させている点、さらには主要道路を広場の上のあたりに集めようとしている点など、シエナの都市建設の基本的発想は非常にすぐれている。中世の混乱にみちた町並みを秩序のある都市へと変えようとする、シエナ市民たちの試みは、見事な成功をおさめたといえるだろう。まさしく彼らは、都市を「芸術作品」にしたのである。だから今日なお、都市の問題、その景観の美しさや人間的尺度にあった都市空間、あるいは都市の形の意味と機能といった問題に関心のある者に、シエナは貴重な思索の糧を与えてくれるのである。

最後に、フィレンツェやピサなど、北の方からシエナを訪れた者がくぐるカモッリーア門に残る、旅人へのシエナ市民の古いメッセージを紹介しておこう。そこにはラテン語でこう記されている。

「シエナは汝に対し、この門よりも広く心を開く」

このメッセージが本当かどうかは、読者諸氏がみずからシエナを訪れて確かめてほしい。

(いしなべ·ますみ／成城短期大学助教授·美術史)

シエナ・ミュージアム・ガイド

Ⓐドゥオーモ付属美術館

Ⓐドゥッチョの「マエスタ」

Ⓑ市立美術館

Ⓑ A.ロレンツェッティ「市とコンタードにおける善き政府の効果」

Ⓒ サーノ・ディ・ピエトロ「聖母マリア」

シエナは、13世紀後半から16世紀にかけてイタリア美術の一時代を築いた[シエナ派]の作品の宝庫である。有名なシモーネ・マルティーニの「受胎告知」(フィレンツェ、ウフィッツィ美術館)など、ここシエナにないものもあるが、以下の三つの美術館で、シエナ派の流れを概観することができる。

シエナ派絵画の源流は、北・中部イタリアのベネディクト会修道院で数多くつくられたミニアチュール(写本画＝凝った飾り頭文字や本の挿絵)にあるとされており、そこからシエナ派の特徴である優美な色彩や、繊細で洗練された様式への嗜好が生まれたと指摘されている。

シエナ派の基礎を築いたのは、フィレンツェのジョットと並び称される巨匠ドゥッチョで、東方のビザンティン美術と北方のゴシック美術を微妙に融合させた作風を確立。その弟子シモーネ・マルティーニは、フランスとの交流の中から、より甘美で華やかな、装飾性の高い画風をつくりあげた。リッポ・メンミ、アンブロジオとピエトロのロレンツェッティ兄弟らを輩出したシエナ派は、イタリアだけでなくヨーロッパ各地に強い影響を与え、それが国際ゴシック様式へと発展していく。また、やがて来るルネサンスの礎ともなるのだが、ルネサンス美術の中心はフィレンツェへと移り、シエナ派の黄金時代は終わりを告げる。

Ⓐドゥオーモ付属美術館
Museo dell'Opera del Duomo

未完成のままに終わってしまったドゥオーモの拡張工事。南側に長く突き出したつくりかけの身廊がそのまま残されているが、この部分がドゥオーモ付属美術館となっている。

一階には、ドゥオーモのファサードを飾っていたジョヴァンニ・ピザーノとその弟子たちによる、力強い表情をもつ聖人たちの彫刻のオリジナル作品。

二階のドゥッチョの間Sala di Duccioには、ドゥオーモの主祭壇画として描かれた「マエスタ(荘厳の聖母)」がある。これがシエナ派の文字どおりのスタートとされる作品である。そして三階にはシモーネ・マルティーニの「福者アゴスティーノ・ノヴェッロ祭壇画」。福者が起こす四つの奇跡、オオカミに襲われた子供を助ける場面、バルコニーから落ちた子供を助ける場面、崖から落ちた騎士を救う場面、ハンモックから落ちた子供を蘇生させる場面が、中世世界を彷彿とさせる。また、1260年のフィレンツェとのモンタペルティの戦いの際に、市民が聖母の加護を祈ったという聖母子像「大きな目の聖母」もある。ビザンティン絵画の影響がまだ色濃く、たとえばドゥッチョの「マエスタ」などと比べてみると、シエナ派の洗練された繊細な筆致がよくわかる。つくりかけのファサードからの眺めがすばらしい。

開館時間：夏期9:00～19:30　冬期9:00～14:00
料金：5000リラ(約600円)

Ⓐ「大きな目の聖母」

Ⓑ市立美術館
Museo Civico

カンポ広場に面した市庁舎の中にある美術館。ここにはシモーネ・マルティーニとアンブロジオ・ロレンツェッティの代表作品が収められている。評議会の議場として使われていたことから「評議会の間」と呼ばれる広間には、マルティーニの重要な作品である壁画の「マエスタ」。これはドゥッチョの「マエスタ」の構図をもとに描かれたものだが、ドゥッチョよりもはるかにフランス・ゴシック的、貴族的な甘美さにあふれている。これは彼が、ナポリの名君ロベール・ダンジューに寵愛された宮廷画家でもあったこと、あるいはフランスのアヴィニヨンの教皇庁に招かれ、そこで詩人ペトラルカとも交遊したことなどからわかるように、知的で、なおかつフランス的な優雅さをも持ち合わせていたからではないだろうか。

次はアンブロジオ・ロレンツェッティ。「評議会の間」の隣の「平和の間」の壁面に、彼の代表作である「善き政府のアレゴリー」「市とコンタードにおける善き政府の効果」「悪しき政府のアレゴリーと悪しき政府の効果」が描かれている。いずれもドゥッチョやマルティーニのような宗教色はなく、タイトルからもわかるように、共和主義の理想を、アリストテレス的な「公共善」と「正義」という思想に重ねて寓意的に表現したもの。おおらかなタッチで描かれた市民生活の様子…建物の様式、仕事ぶり、子供の遊び、郊外の風景、農作業などは、当時の人々の暮らしを克明に伝える貴重な資料ともなっている。

開館時間：夏期9:30～18:45　冬期9:30～12:45
料金：5000リラ(約600円)

Ⓐ S.マルティーニ
「福者アゴスティーノ・ノヴェッロ祭壇画」

Ⓑ S.マルティーニ「マエスタ」

Ⓒ国立絵画館
Pinacoteca Nazionale di Siena

ドゥオーモとスカーラ病院の間の道を南に入ったサンピエトロ通りVia San Pietroの左側、15世紀後半に建てられたパラッツォ・ブオンシニョーリの建物の中にあって、ここではシエナ派の作品が年代を追って、系統的に並べられている。フィレンツェとの戦いに勝って以来、シエナは聖母を守護者に戴いてきた。そのせいもあって、キリストを抱く聖母マリア像が、これでもかといわんばかりに続く。しかし、同じ主題でも時代・作家によって顔の表情、人体の描き方が異なっており、その差異が興味深いところでもある。

ここで注目されるのは、アンブロジオ・ロレンツェッティの「A sea-side town」と題された小さな風景画。宗教画が圧倒的に多い中世絵画の中でひときわ異彩を放っており、緑とピンクを基調にした画面は幻想的な雰囲気を漂わせている。また、ロレンツェッティ兄弟らが黒死病に倒れてシエナ派の隆盛期が去ったあと、15世紀に登場するサセッタ、ジョヴァンニ・ディ・パオロ、サーノ・ディ・ピエトロなど、ルネサンス・シエナ派ともいえる画家たちの幻想性を増した画風、さらにその後のソドマやベッカフーミなどのマニエリスムへと続く作品なども見逃せない。

開館時間：8:30～13:45
8:30～13:00(日曜・祝日)　月曜休み
料金:8000リラ(約960円)

Ⓒ ジョヴァンニ・ディ・パオロ「ウミルタの聖母」

Ⓒ 国立絵画館

Ⓒ A.ロレンツェッティ「風景画」

シエナの都市と建築を知るキーワード

シエナの狼

シエナの紋章

■シエナとフィレンツェ

中世イタリアの都市の間では、絶え間ない抗争が幾度も繰り返された。なかでも、トスカナ地方の二大新興勢力であり、わずか50kmしか離れていないシエナとフィレンツェは、領土問題やトスカナの覇権をめぐって、何度も争いを続けてきた。しかも、教皇派と皇帝派という対立もあって、戦いは熾烈を極めるものだったという。宿敵ともいえるこの二都市の争いの天王山となったのが、1260年のモンタペルティの戦いである。不利な立場にあったシエナが、この戦いで奇跡的な勝利をおさめ、以後シエナは、さらにいっそう発展していくことになる。このモンタペルティの戦いのときに、市民は聖母マリアに加護の祈りを捧げたという。以後、シエナの人々はみずからの都市を「聖母の都市」と呼び、聖堂の祭壇画などを美しい聖母像で飾っていく。シエナの絵画に聖母像が多いのは、このためである。

■コムーネ

中世イタリアの自治都市、都市国家のこと。最初は、秩序を確保するための私的誓約団体として結成されたものだったが、やがて政治機構をもつ自治共同体に成長し、ついには都市と周辺地域を支配して都市国家を形成するようになった。こうしたコムーネは11世紀末から12世紀前半の北・中部イタリア各地の都市で誕生。シエナのコムーネもやはり12世紀はじめにでき、「ノーヴェ体制」というすぐれた政治体制をつくって黄金時代を築いた。「ノーヴェ」、つまり「9人」の行政責任者を置いて、対立しがちであった豪族や貴族、大商人たちをバランスよく治めていったのである。こうした市民的な統治があったからこそ、シエナは大きく発展することができた。

■ルーパ・セネーゼ(シエナの狼)

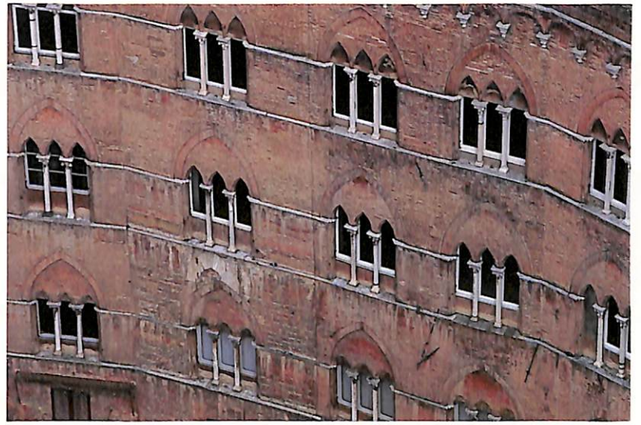
大聖堂や市庁舎、城門、あるいは街角などでよく目にするのが、狼の乳を飲む双子の彫刻である。これはシエナのシンボルであったルーパ・セネーゼと呼ばれるもので、乳を飲む双子は、ローマ建国の神話に登場するロムルスとレムス。古代ローマに起源をもつことを望んだシエナの人々が、自分たちの都市の建設者をレムスの子供たちと考え、この神話を引用したのである。現在もシエナ市の紋章となっている黒と白のバルザーナ(二色紋)も、こうした神話から生まれた。

■マンジャの塔

カンポ広場に面した市庁舎の脇に建つ、高さ88mの塔で、シエナのシンボルとなっている。当時、シエナ市内には無数の塔が建っていたが、それは有力者たちの力のシンボルであると同時に、頻繁に繰り返される私闘の際の要塞でもあった。つまり、塔に登ってはしごをはずし、上から石や矢を放って攻撃するのである。こうした私闘を圧するためにも、市内のどの塔よりも高く、市民の自由と独立を象徴するマンジャの塔が建てられることになった。

ところで、マンジャというこの風変わりな名前。稼ぎを食う者、浪費家という意味の「マンジャ・グァダーニ」から来ており、これは塔の上で時を告げる鐘を鳴らした男の仇名だった。その後この塔には自動時計がつけられたが、この時計がしじゅう故障して修理をしなければならず、稼ぎを食うので、かつての鐘つき男の仇名をつけたのだという。

塔に登るのは一時中止されていたが、現在は人数の制限はあるものの、登ることができるようになっている。最上部からの眺めはすばらしく、市内や郊外を一望のもとに見渡すことができる。



アルコ・セネーゼ

■ドゥオーモ

イタリアでは、市の中心となる聖堂をドゥオーモと呼ぶ。ドゥオーモと呼ばれる聖堂には、たとえばフィレンツェやシエナのように大司教がいる聖堂であることが多いので、「カッテドラーレ」とほとんど同義に使われるが、ドゥオーモとカッテドラーレは同じではない。カッテドラーレというのは、司教座(カテドラ)のある聖堂という意味で、大聖堂と訳される。ドゥオーモのことをしばしば大聖堂と呼ぶが、厳密には意味が違うのである。ちなみに、この「ドゥオーモ」という言葉は、ラテン語の「ドムス」、つまり「家(神の家、信者の家という意味を含む)」という語から派生したもの。

■パラッツォ

都市の中にある大規模な建物のことをいう。君主や貴族、大商人、司教などの住宅であったり、ときには市庁舎などの公共の建物であったりする。とくに都市部における邸宅をパラッツォといい、郊外の別荘は区別してヴィッラと呼んでいる。

北西アフリカやスペインのイスラム系方形中庭型城館を起源とする説もあるが、イタリアでは中世のロマネスク時代に登場。初期のパラッツォは、中庭をもつ箱型多層建築で、がっしりした壁に覆われた威容を誇るものであった。これは私闘や政争の際の要塞としての役目も果たしていたからで、胸壁や塔がつく例が多いのもそのためである。ルネサンス期になると、たとえばフィレンツェのメディチ家のパラッツォ・メディチ・リッカルディのような中庭に優雅な柱廊をもつもの、あるいは歩廊や開廊をもつものなど、建築の意匠は多様に変化する。こうしたパラッツォの建物や中庭の設計が、やがて各国の宮殿建築や庭園様式にも影響を及ぼしていく。

■アルコ・セネーゼ

シエナ風アーチのこと。市庁舎やパラッツォなどの窓をよく見ると、アーチ型の窓枠の中に、さらに三つのアーチをつくり、それを二本の円柱で支えるというスタイルをとっている。こうした二重のアーチや三叉窓をアルコ・セネーゼという。シエナ独特の建築の装飾様式で、繊細で洗練されたシエナの美意識をよく表している。

■黒死病

栄華を誇ったシエナの将来を、シエナの夢を、無惨にも打ち砕いてしまったもの。それが黒死病(ペスト)である。ヨーロッパ全土に暗黒と空白の時代をもたらした黒死病は、西方からシルクロードに乗って伝播し、またたく間にヨーロッパを襲った。シエナもその例外ではなく、1348年に壊滅的な打撃を受ける。黒死病という名が示すように、敗血症で全身が黒ずみ、あるいは脇の下や股のリンパが腫れて、あっという間に死んでいく人々の惨状は、目を覆うほどすさまじかったという。

最盛時7～8万人だったといわれるシエナの人口は、黒死病によって半分以上が失われ、その後の紛争や荒廃でついにノーヴェ体制も崩壊。そして16世紀になるとメディチ家の支配下におかれ、トスカナ大公国へと編入されて、輝かしい歴史に終止符を打つことになる。

※参考文献：石鍋真澄『聖母の都市シエナ』『ベルニーニ』(ともに吉川弘文館)